◆ 巻頭言

女性センターの担い手の労働環境再考

月野　美帆子

新聞の「家庭欄」で女性に関するニュースを担当しており、各地の女性センターで取材する機会がしばしばあります。最近、ちょっと驚かされたのが、首都圏の異なる地域のセンターがほぼ同時期に、女性の貧困や生活困難に取り組む企画を始めたことでした。

貧困や格差は注目されるようになったとはいえ、家庭の“大黒柱”たる男性の貧困が注目されるばかりで、女性の問題としてはなかなかとらえられていません。そんな中で同時多発的に企画が始まった背景には、女性が直面する課題の本質をよく理解したスタッフの存在があります。女性の日々の悩みや思いに寄り添ってきた、スタッフのスキルとノウハウが発揮されていると言えるでしょう。

けれども、女性センターで働くスタッフの労働環境は、決して安定しているとは言えません。内閣府が昨年行った調査では、全国の男女共同参画センターで働く職員の４割以上が非正規で、その年収はフルタイムでも９割が300万円未満に集中していました。

首都圏のセンターで長年働いてきた30歳代の非正規職員（相談員）は男性管理職から退職を促され、こう言われたそうです。「若い人がこんな職場で長く働くもんじゃない」と。

女性を支える活動が、“安い労働力”として女性を使い捨てることで成り立つのでは、矛盾しているとしか言えません。男女共同参画の最前線の担い手として、女性センターで働くスタッフの処遇改善は不可欠です。それが、よりよいセンターの活動を生むことにつながると確信しています。

PROFILE

月野 美帆子
（つきの みほこ）

読売新聞東京本社記者。福島、横浜支局などを経て、出産後に本社編成部。子どもを産んで記者生活が激変したことがきっかけで女性の問題に関心をもち、2001年から生活情報部で男女共同参画政策やDV防止法、母子家庭問題などを取材。朝刊「くらし家庭」面や夕刊「シゴト」面などを担当する。